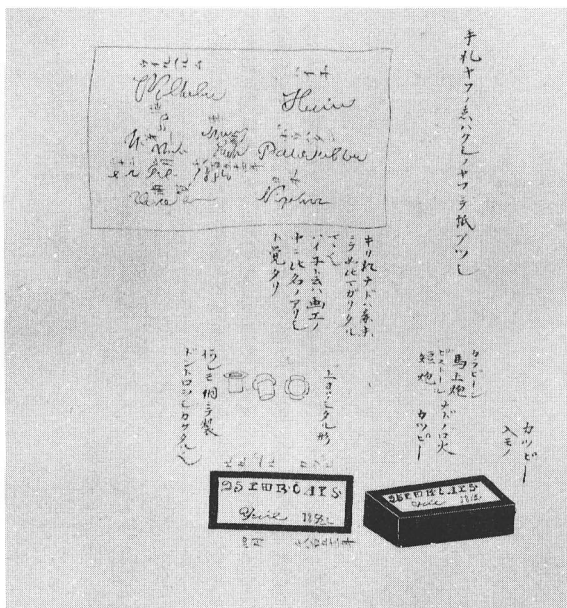


開港 ひろば

NEWS YOKOHAMA ARCHIVES
OF HISTORY

●編集・発行／横浜開港資料館
横浜市中区日本大通3 丁231
電話 045(201)2100
●発行日／昭和61年2月1日
●印刷／南三信印刷所



「米艦渡来記念ノ図」の一部。ペリー艦隊の随行画家ハイネの名刺を描いたもの

収蔵資料の紹介

黒船絵巻と瓦版

ペリー艦隊の来航に際して、横浜が条約交渉の舞台として選ばれたことは、その後の横浜の歴史にとって大きな出来事でした。日米和親条約締結記念の地に立地する当館では、そのような意味から、黒船来航にまつわる多くの資料を収集しています。二月から始まる「黒船絵巻と瓦版」展に出品される資料を中心に、そのいくつかを紹介してみよう。

黒船来航

嘉永六年六月三日（一八五三年七月八日）夕刻、浦賀沖に四隻の黒船が現れた。アメリカ東インド艦隊司令長官ペリー提督の率いる日本遠征隊である。多くの日本人に「嘉永癸丑（きちゆう）の年」として記憶されることになる一連の出来事が、この日から始まる。

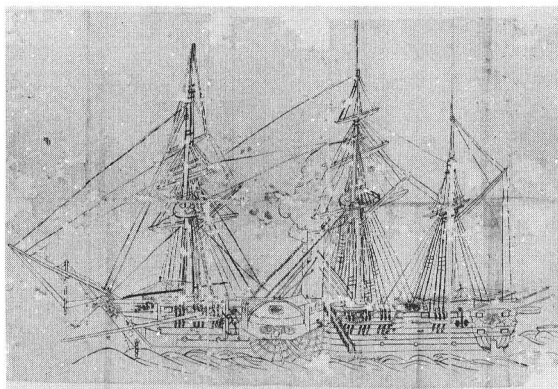
翌日未明、南の空にあざやかな流星が現れ、花火のような光を放って浦賀の町を照らし出し、米艦の船体や帆柱を青く浮かびあがらせながら、夜空を横切つて消えていった。ペリーは日記に、この流星について、「この特異な、鎖国に生きる人々を、文明世界の一員として仲間入りさせるといふ今回の企てが、流血の惨なく成功するよう神に祈る」われわれに対する吉兆とみようと記した（モリスン著 後藤優訳『ペリーと日本』一四五―一六頁）。

黒船絵巻

ペリー艦隊の来航は、永い鎖国の間に鬱積していた世界への好奇心を沸騰させた。人々はこの「異国船渡来一件」をさまざまに記録した。幕府や諸藩は、蘭学者や絵師を派遣して、情報収集にあたられた。その様子は、日本遠征

の公式記録である「ペリー提督日本遠征記」にも、つぎのように記述されている。

「日本人はいつでも、異常なまでの好奇心を示した。艦隊を訪れた役人とその従者達は、決して休むことなく、あらゆる隅々をのぞいて回った。珍しそうに大砲の砲口や小銃を検査し、ボートを測り、機関室を熱心にのぞきこんだ。かれらは眼で観察するだけでは満足せず、ゆるやかな上衣の左胸の中のポケットにいつでも持っている筆記用具、すなわち桑樹皮製の紙と墨や毛筆を絶えずとり出して筆記をし、スケッチをした。」（第一卷第十九章より抄記）（四頁下段へ続く）



堤磯右衛門の描いた「蒸気船ミッシシペン船」下図（堤芳正氏蔵）

館長対談

黒船館・吉田直太氏を迎えて

今回は、新潟県柏崎市東本町で呉服店を営むかわら、先代から引継いだ黒船関係資料を所蔵した「黒船館」を運営しておられます吉田直太氏をお迎えし、資料収集の楽しみや悩み、瓦版を中心とした収蔵品にまつわるお話を伺うことにしました。なお、館員の斎藤多喜夫が同席しました。

館長(遠山茂樹) 本日は、遠いところをはるばるお越しくださいまして誠にありがとうございます。昭和五十四年二月に、横浜開港資料館の開館に先立ちまして、特別展示「黒船渡来とヨコハマ」展を開催しました折に、黒船館から多数の所蔵品を御出陳いただきました。また、当館の設立にあたりまして瓦版等のフィルム撮影をはじめ、その後も展示資料の借用など何かとお世話になっております。

当館では、この二月一日から企画展示として「黒船絵巻と瓦版」展を企画しております。黒船館でも大変数多くの瓦版を集められておりますので、本日は、この瓦版を中心とした所蔵品のことや、収集にまつわる話などをお伺いしたいと存じます。

まず最初に、黒船館の御紹介をお願いします。

吉田直太 商売の呉服店「花田屋」は天保一三年に創業して私で四代

目になります。店の奥にある土蔵を改造しまして、その二階を展示室にしております。昭和五十四年九月以来、一カ月おきにテーマを替えた展覧会を開いておりまして、来年の一月には五〇回目になります。そのうちから特別展を予定しております。

所蔵品としては、瓦版をはじめ、黒船絵巻、開国・江戸末期の和紙、川上澄生の諸作品、棟方志功の版画、浜田庄司の陶芸品、良寛の書、その他民芸品、石版画、キリシタンもの、ガラス、陶磁器、和時計、火縄銃などの骨董品等が集められております。

館長 これらの収蔵品については、先代でお父さまの正太郎さんが若い時から精力的に集められたと聞いておりますが、その先代のお話を聞かせ願えませんか。

吉田 父は明治二〇年生まれで、地元・柏崎の小学校を卒業した後、慶応の普通部に入り五年間を過し

ましたが、予科に入った直後父親が病気でなくなってしまい、こちらに呼び戻されました。幼少の頃から大変物好きといましようか、当時のタバコ銭位で買うことのできた瓦版などを集めていました。横浜絵はまだしも、浮世絵などはちょっと手がでなかったんでしょうね。集めたものはどんなにつまらぬものでも、ずっともち続けて一枚も無くすということがありませんでした。また、決して高価なものも求めず、自分の小遣銭で買えるものしか集めておりません。しかも、自分の好みでしか集めず、他人がくれようとする物でも好みに合わないものは断わって貰おうとはしなかったという人です。

館長 正太郎さんが黒船ものを集めるようになったきっかけというのはなんだったのでしょうか。

吉田 慶応に通いはじめた時分のことだと思いますが、神田の古本屋で瓦版の山を見ていたら、ペリーとの似顔絵がでてきた、ペリーとはこんな顔だったのかと思つてつぎつぎにめくつていくと、今度はそれと似ても似つかないペリーの顔がでてきた、そこで、一体ペリーの本当の顔とはどんなものなのか、といった疑問がでて、そんなことから開国についての興味が湧いてきた、と父から聞かされたことがあります。

館長 ところで、正太郎さんの末弟の吉田小五郎さんも慶応を出て

おられますね。小五郎さんは、慶応義塾で歴史を専攻なされた後、幼稚舎の先生となり、そのかわらキリシタン史を勉強されて、昭和十三年レオン・パジェスの翻訳書『日本切支丹宗門史』(岩波文庫)等を出しておられます。兄弟二人共、柏崎から慶応に入られたというのは当時としては大変珍しいことと思いますが、何か理由があるのでしょうか。

吉田 正太郎と小五郎は五人兄弟



吉田直太氏

の長男と末子で、中の三人は早く亡くなりまして、変わり者の二人が残りました。

柏崎は港もなければ農地も少なく、大変貧乏な町でしたから当時は越後の縮緬を持つて出稼ぎに出していました。私の初代は木造船で山口から大阪に廻つて古着を集める商売をしていたのですが、その初代とむかし代議士だった牧口義矩という人と知り合ひで、その人が福沢諭吉が創立したばかりの慶応義塾を出ていたので、父を慶応に行かせるよう勧めたということのようです。

館長 一代であれだけのものを集めるというのは大変な苦労だった

と思うのですが、収集にまつわる面白いエピソードでもありましたらお聞かせください。

吉田 父は、良寛の書にも興味をもっていました。ある時、古道具屋の店先で歌らしいものが書かれた一枚の紙切を見つけたし、一五銭で手に入れましたが、署名があるわけではないのですが近頃では良寛の書として珍重され、その書を各地の展覧会に借りにきています。

また、柏崎に地主で高野米峰という人がいまして、父が二〇才の時米峰の画を大層気に入つて五円で百枚全部買ったのですが、当時五円もなかったということで評判になったそうです。それが後年、北大路魯山人の目にとり、鉄斎以上のものだとホレ込みまして、二・三枚の画をあげた処、ペリーを描いた火鉢を送ってくれたり、私が結婚した時には、引出物に銘入りの鉢を百ばかり作つていただいたりしました。柳宗悦さんとも親交がありまして、浜田庄司の無名時代の作品も集めています。その意味では、とらわれない確かな目をもつていたと思いますね。

館長 自分で物を見て、その価値を見定めることがいかにむづかしいかということなのでしょうね。

斎藤多喜夫(館員) 私が資料館の設立にたずさわつた最初の仕事は、黒船館所蔵の瓦版のフィルム整理でした。こんなものもあるのかと強く印象に残りまして、その

後もずっと関心をもち続けてきましたが、今回資料館で出している『たまくす』という雑誌の第四号に調べてきたことの結果を発表いたしました。とくに、黒船の絵を調べてみますと、長崎絵を真似たり、そのまま引き写したりした瓦版があるかと思うと、最新の情報を採り入れたものがあつたりして、瓦版を見るだけでも、当時の日本人の、アメリカをはじめ世界というものに対する見方が少しづつ変わっていく有様を読みとることができ、大変興味を覚えます。

館長 瓦版を比較検討していきながら、これらがどういう経緯でつくられていったのかを調べることが大変興味のあることです。これからの課題だと思います。とりわけ黒船来航という事件が起きた直後、それが木版に刷られ大量に全国にニュースとして流布したということは実に驚くべきことです。その点、この瓦版を誰が、どんな意図で買ったのか、やはり需要があつてあれだけのものがつくられたのですから、非常に興味のあるところですね。

吉田 当時は、やはり売ったのでしょね。なかには売買を禁ず、と書いてあるものもありますが。齋藤 なかには百枚限りというものもあります。確かに値段の入ったものは見たことがありませんが、やはり売ったのだと思います。

吉田 新潟のある旅館が、黒船の

瓦版を使った広告をつくっていましたが、これはお得意さんに配ったものよろしくね。

齋藤 おそらく江戸で出たものをそのまま複製したものだと思います。

館長 これらの瓦版を買った人は、武士よりは庶民だと思うのですが、どんな気持ちで見たのでしょうかね。齋藤 昔の人は記録として日記をつけていますが、感想を書き残しておりませんからよく分かりませんが、おそろく好奇心からではなかったでしょう。ペリー艦隊の黒船には外輪が付いているという情報が入ると、すぐに新しい情報を採り入れて瓦版にしていますから、当然それを受けとる側の需要もあつたという事は言えると思います。

館長 情報を求める気持ちというものが、どこからきたのかということになります。商人達にしても、貿易に関する情報を得て、新しい商売を始めるところまではなかなかないですね。

齋藤 確かに商売に直接結びついているところまではいっていませんが、かなり商人達が瓦版などを通



遠山館長

じて情報収集に熱心であつたことは事実です。現に、徳島の三木文庫には、藍間屋が江戸に行く度に集めた瓦版が大幅帳の間にはさまれて残つたりしています。横浜開港に際して幕府が強制的に商人を開港場に送りこんだといわれていますが、かなりの短期間に商人が集まつたのも、商人達の情報収集が伏線になっていたのだと感じられます。

吉田 瓦版には、同じ題材を扱った似たような絵がたくさんありますが、そのひとつひとつが微妙に違っているのです。このあたりが大変面白いところだと思います。なかには、非常に変わった瓦版がありまして、絵の左に黒船が書いてあり、右隅に日本の大砲が書かれていて、砲身の先に火を付けると画中に仕込まれた火薬を伝わって黒船が燃えるという工夫がこらされています。

館長 黒船来航という事件は、いくら幕府が秘密にしようと思つても、たちまちうわさとして流れてしまふのですが、幕府としては、この事件はたいしたことはない、幕府の力で押さえてつけられるのだ、ということを示したい訳です。瓦版のなかに、ペリーの一行が横浜の応接所で幕府の役人と会見する際に、日本式に床にひれ伏して挨拶している図がありますが、実際はそんなことは無い訳でして、これなんかは民衆に幕府の力を誇

示した一例なのでしょうね。そういうことがあつたとしても、瓦版の情報はだんだんと正確なものになってきているようですね。この情報源は横浜で実際に見たものなのか、それとも別のルートで情報を仕入れたものでしょうかね。

齋藤 確かに最初の頃は、瓦版の中味も荒唐無稽のものがあります。たとえば、アメリカ人は色が白くて身体中に唐草模様の彫物があるとか。基本的には、安政六年(一八五九)頃までの情報源は地理書などの書物ですが、万延元年(一八六〇)以降になると、横浜で実際に見聞したものが出てくるようになります。また、情報の媒体も瓦版から横浜絵や和本に移ってきます。

館長 ところで、この二月からの『黒船絵巻と瓦版』展には、黒船の黒船絵巻が三展示されます。この絵巻物は、黒船来航や、ペリーと幕府の会見の模様などを描いたものが多く、瓦版とは違つた、当時の記録を伝えるものとして大変貴重な資料であります。これらの大部分は、各藩が絵師を同道して現場の様子を描かせたもので、またそれが別の絵巻物に転写されて現在までかなりの点数が残されております。

齋藤 黒船絵巻が所蔵しておられる米艦ポーター号の絵巻には、甲板に山羊みたいなものが描かれて

ますが、これなんかはおそろく実写ではないでしょうか。いずれにしても、黒船絵巻は瓦版とは違つて何がしかのオリジナルティーを有していますね。

吉田 アメリカの方も相当関心をもっている描き遣していますね。

齋藤 日本人とアメリカ人が、お互いに真剣に理解しあおうとした最初の機会であつた訳ですね。

館長 「黒船絵巻」の研究は余りなされていません。それらのなかでも、各藩の派遣した絵師によつて描かれた絵巻についてはその経緯はほぼ分かっている訳ですが、そうでない黒船絵巻もないわけがなく、それらが実写によるものなのか、お抱え絵師達の描いた図をひき写したもののなのか、その辺のところは充分解明されていません。今回の展示に出します福田本「米艦渡来記念ノ図」絵巻は、最近当館で入手したのですが、その由来がはっきりしないのです。ところが、そのなかの農具や幕府への献上品などは非常に克明に描かれておりまして、何らかの形で幕府に関係していた人間でなければ、あれほど微に入り細に入った描写はできないと思います。それにしても、「黒船絵巻」の研究はまだこれからだという気がします。

吉田 そこへいくと横浜絵は、何年何月ということがはっきり分かるようになっていて大変便利なもの

のですね。

斎藤 瓦版は届出をしませんからどこにも製作年月は刻まれておりません。今というアングラ出版みたいなのではないでしょうか。

吉田 ですから横浜絵には余り思想的なものはありませんね。ニュース性の高いものはありませんが、幕府に届出をしていわば検閲を受けている訳ですから、穏当ならざるものは無いのでしょうか。

斎藤 風刺的なものもありますが基本的には幕府の開国政策に乗っかっているといえると思います。風刺性ということでは横浜絵よりは瓦版ということになるでしょうね。

吉田 それにしても横浜絵の売れゆきは大変なものそうですね。なにしろ幕末に売られた横浜絵の数は、それ以前の江戸時代にでた錦絵の数を上回っているといえますから。その種類も七・八百に及んでいるそうですね。

斎藤 外国商館を描いた横浜絵をよく見えますと、外国人と日本人とが対になって立話をしていたり、馬車に乗りあわせていたりして、黒船瓦版と比較してみますと、わずか十年位の間に日本人の意識が急激に変化したことが感じられます。

館長 黒船絵巻は、主として武士層の知的関心のありようを物語っているといえるでしょう。攘夷、つまり外国と戦う目的から出発し

て、相手の軍備の実情を探ることに熱心でした。軍備への関心は、

たちまち外国の文化一般や政治・社会へと広がりました。これにたいして瓦版は、庶民の関心の状況をあらわしています。はじめは愚鈍な恐怖心や好奇心から出発したにせよ、やはり異国の文化や生活の真実を知りたいという知的関心へと発展します。すでにペリー来航前に、災害や世相の情報を伝える瓦版の出版が盛んでしたが、黒船さわぎで、飛躍的に拡大しました。これがわが国の新聞誕生の歴史となります。

ちがった性格のものですが、武士層・庶民層を通して、欧米文化にたいする日本人の知的関心は旺盛であり、これが開国への過程を比較的小スムーズにする力となったのではないかと思います。それに

つけても、吉田正太郎さんのような資料蒐集家の御努力に感謝しています。一枚の瓦版であれば、あまり資料的価値がないように思われるものも、何百枚が集まると、その多種多様な図柄から、明治維新の歴史を照らした光となることを、あらためて感じました。

本日は、吉田直太さんから興味あるお話をうかがいました。今回の本館の展示『黒船絵巻と瓦版』の貴重な参考となります。ありがとうございます。

(二月一七日の対談です)

(二頁から)

この「従者」のなかには、諸藩が情報収集のために送り込んだ藩士や絵師達が、相当数いたらしい。今日一般に「黒船絵巻」として知られる絵巻類の多くは、その成果が集められ、後世に伝えられたものである。

今回の「黒船絵巻と瓦版」展では、当館がこれまでに収集したこれらの絵巻類が展示される。そのうち「黒船来航図絵巻」と「着船の図」は、本誌第八号で紹介済みなで、ここではその後収集された福田本「米艦渡来紀念ノ図」を紹介しよう。編者の堀口貞明は上州(群馬県)の出身、湯島聖堂に勤務する旗本に仕えた学者で、佐久間象山との交際を通じて海外の事情に精通していたという。日本側の全権大使格が湯島聖堂を司る林大学頭であったこと、そして応接場所の横浜には、聖堂の関係者もかなり多く送り込まれたこととか

ら考えて、その一員として、堀口氏が応接の様子を実地に見聞したことも推測されるという。

この絵巻の特徴は、日米交渉や交歓の華美な場面の描写を避け、ペリー艦隊のもたらした近代文明の産物に視線を集中し、それらを長さ約十八メートルにわたって克明に記録している点にある。海外の事情に精通していたといっても、それは書物を通じての知識にすぎなかつたろう。ペリー艦隊の来航

によって、近代文明の産物を眼のあたりにした時、知識欲は一層かきたてられたに違いない。この絵巻を見ていると、見聞したものを後世に伝えて、新時代に備えようとした編者堀口氏の熱意が、ひしひしと伝わってくるようである。

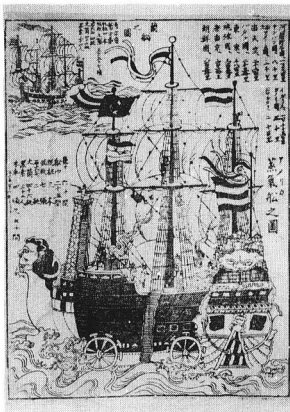
『ペリー提督日本遠征記』は、日本人の旺盛な知識欲に触れて、「この興味ある国の前途」が有望であるという見通しをたてているが、その見通しが現実のものとなるためには、この堀口氏のような人々の働きが必要だったのである。

(この項詳しくは、阿部征寛黒船絵巻「米艦渡来紀念ノ図」をめぐって)「横浜開港資料館普及誌『たまぐす』第四号所収」参照

黒船瓦版 黒船に接した庶民のなかでも、絵ごろのある人は、やはり筆をとって記録を遺した。のちに「石版製造の元祖」として知られることになる磯子村(現在磯子区)の堤磯右衛門もその一人であつた。今回出品される「蒸気船ミッセンペン船」(堤芳正氏蔵)はその遺品である。しかし大半の庶民は、瓦版と呼ばれる木版刷りの粗末な印刷物をおとして事件のことを知ったのであつた。

これら「黒船瓦版」の多くは、絵巻とは違って、実地の見聞にもとづくものではなく、長崎版画や漢籍・蘭書から取られた絵や知識に、耳から得た情報をプラスしたものである。そのなかには、アメリカ人は「ツネエ唐クサ模様ノ彫物ヲナス」とか、蒸気船は「一昼夜三百六十里ヲ走ル、風雨逆浪ヲ不厭、発ル時ハ、アタカモ大海ヲ竜ノ渡ルカ如シ」といったような、鎖国時代に特有の荒唐無稽な知識が見られるかと思うと、合衆国国書蘭文和解など、公文書にもとづくかなり正確な最新情報も盛り込まれている。鎖国から開国への歴史の転換期に際会して、庶民の対外認識が少しずつ、しかし確実に進歩していく様子を窺うことのできる資料として、これらも貴重である。

(詳しくは、斎藤多喜夫「長崎から来た黒船 開国期瓦版の海外情報」『企前掲「たまぐす」第四号所収」参照)



長崎版画をもとにした黒船瓦版「アメリカ蒸気船之図」(黒船館蔵)

『幕末のイギリス外交官 アーネスト・サトウ』展余話

英国大使館旧蔵の日本外交文書

前回の特別展「幕末のイギリス外交官 アーネスト・サトウ」展では、多くの関係資料と共に、幕府及び明治政府が駐日英公使とその属員に送った書翰原本を、早稲田大学図書館と東京大学法学部法制史資料室の格別のはからいで出陳・展示することができた。

さて、公使パークスやサトウに宛てた幕府老中や東久世通禧の、墨蹟・花押も鮮やかな書翰が、危機一髪のところまで亡失を逃れ、数奇な運命を辿って東大と早大のそれぞれの書庫に落ちていたことを、展覧された方々は御存じであつたらうか。これらの書翰類は、戦後、東京の英国大使館から廃棄処分のため他の書類と共に紙屑屋に払下げられ、その後、昭和二六年に或る紙屑問屋と書店から相次いで東大法字部と早大図書館に収まったと云う(その経緯は、同年一二月『早稲田大学図書館月報』第六号に詳しい)。書翰は、公使館で数通から十数通ごと年次別に折本に装幀し、表と裏に杉板を貼り、表紙題簽に年月・帖番号を記入、整理・保存されていた。東大に二三一帖、早大に八〇帖が現存するが、

なお欠落帖がある。再生紙にされてしまったのだろうか。大型と小型の二種があり、大型帖は老中から公使宛書翰で、安政六年七月、慶応二年三月の三六帖。小型帖は、外国奉行・神奈川奉行から公使館員宛の書翰、万延元、明治六年の一六二帖。同じ小型帖で、老中書翰の附属文書を取めたもの一四帖がある。書翰は、幕府が、蘭文訳のち英文訳と共に英国公使館へ送致した正本の日本語原本である。正統『通信全覧』編年之部は、幕府と各国公館との往復文書を編纂したものだが、各国への往翰は原本の控、或いは写本に基いており、この書翰原本によつて『通信全覧』本の欠脱を補い、訂正すべき部分が少ないからである。

書翰類のほか、東大所蔵分には、書翰抜萃(安政六、明治二六年、六冊)、書翰案存(慶応三、明治元年、二冊)、庶務書翰留(明治二、三二年、二七冊)、無翻訳書翰留(明治三、一一年、七冊)ほか、公使館備用の、幕府及び明治政府からの来翰写綴がある(以上『早稲田大学図書館紀要』第一号所載の解説を参照されたい)。

以下、出陳した書翰原本のうち、

二点について紹介してみよう。

鎖港談判通告

以書翰申入候。然は邦内の人心外交を欲せざる二付、外国人を御け港を鎖すへき旨、京都より台命にて、右応接之儀自分え御委任相成候間、委曲面談可及候得共先此段申達置候。拜具謹言
文久三年五月九日

小笠原図書頭(花押)

右は、老中格小笠原長行が英代理公使ニールに送致した外国人退去・開港場閉鎖の談判通告である。この直前、生麦事件賠償金が支払われた。前年暮以来、尊攘派浪士による横浜襲撃の噂が流れ、京都朝廷は將軍に攘夷決行を迫り、英国艦隊は続々と横浜港に集結、幕府は、ニールの強硬態度と尊攘派との板挟みで支払い延期を重ね、漸くこの日の早朝、償金を極秘裡に公使館へ運び込んだのである。

そして、予告通り冒頭の文書が各国代表の許へ届けられた。通告内容は、既に神奈川奉行から仏公使を通して伝えられており、その際奉行は、朝廷や幕府内の尊攘勢力に攘夷の不可を知らしめるため、抗議の返書は強硬であればあるほどよい、と述べていた。

この通告書は、来日以来、日本語の習得に励んできた通訳生サトウにとつて、その読解・翻訳能力を試された最初の外交文書であった。ニールは、書記官ユースデン

に蘭文訳から、臨時通訳官シーボルト及びサトウには日本語原本からの翻訳を命じた。萩原延寿氏によれば、サトウ訳が原文の語順を最も忠実に追っていると云う。

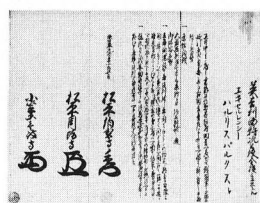
しかし、これまで紹介されてきた日本語原文は、前出『続通信全覧』所載のそれである。これについて、編纂者補注は、原文の記録がないため、F・O・アダムズ著『日本史』(The history of Japan)所

取ユースデンら三人の英訳文から更に日本語文へ重訳したものを、文法・体裁は整っていないが「後日ノ参考ニ供」するためそのまま掲載した、と述べている。『続通信全覧』本と書翰原本との差異、三人の訳文の優劣はさておき、大使館旧蔵の書翰原本によつて、正確な日本語原文が初めて明らかにされたわけである。

条約勅許一件

慶応元年九月、列国代表は、軍艦を率いて兵庫沖に進出。条約勅許・兵庫開港等を迫った。紆余曲折のち、幕府は天皇から条約勅許を獲得。最終回答期限の一〇月七日、老中松平伯耆守宗秀と外国奉行山口直毅は英艦上で各国代表と会見、勅許を伝え、下関賠償金支払・税則改訂などを約束した。展示には、同日付三老中連名のパークス宛書翰、勅許沙汰書を出陳した。後日、山口は、会見後に仏公使ロッシュから本書翰の提出を

示唆され、在坂二老中へ連絡の暇なく、引責を覚悟で、右筆北角某に命じて三老中連署の書翰を急ぎ作成させた、と述懐している(『栗本勤雲遺稿』)。展示した書翰には、後筆箇所など慌しく作成された形跡が窺え、二老中の手書きの花押は稚拙で形も歪み、山口の後日談を頷かせる(写真)。



(早稲田大学図書館蔵)
左は、小笠原岐守の
正式な花押



展示では、このほか、「貴下二は御在職中我国語をも活潑ニ御使用ニ而、我國之ため不一つ方御勤勞は寂間ニも相達候」と、帰国に際して東久世外国官副知事がサトウへ送った礼状、下関戦争後の長州藩当局からの来翰等を出陳した。今回の展示を機会に、英国大使館旧蔵日本外交文書を広く知っていただき、今後、十分な検討と研究が進められることを願ってやまない。末筆ながら、本文書の内容を御教示くださった吉良芳恵氏に感謝申しあげます。(佐藤孝)

資料よもやまばなし

フランスの新聞が得た幕末日本の情報

以前、この「開港のひろば」第二号でフランスで刊行されていた週刊紙『イリュストラシオン』の概略を紹介したことがあった。その週刊紙の整理も進んだので、今回は内容の一部を紹介してみたい。

この新聞は一八四三年にパリで創刊され、一九四四年まで約百年にわたって刊行された絵入り新聞である。絵入り新聞というところから、一八四二年に創刊された『絵入りロンドン・ニュース』がよく知られている。一年遅れて始まったこの『イリュストラシオン』は『絵入りロンドン・ニュース』の成功に刺激されて誕生したものである。世界各地での出来事を絵入りで伝える「世界の新聞」であることも売物にしていた。とは言っても、あらゆる国と国が何らかの形でつながりを持ち、通信網の発達した現代と比べると、当時の「世界」は限られた「世界の一部分」でしかなかった。日本がこの「世界」に加わってくるのは一八四七年(弘化四)のことである。日本近海に異国船が頻繁に出没し、日本にさかんに通商を求めてきた頃である。フランスもインドシナ艦隊を一八四六年に長崎に寄港させ

る。この寄港の様子が日本についての最初の記事となった。

この記事を書くにあたっては、フランス政府の新聞『モニター』紙に載ったと思われる海軍省の報告が下敷となった。このような政府紙の日本寄港報告は以後も、幕末の日本についての最も詳しい情報を提供してくれることになる。他の欧米諸国の新聞も貴重な情報源であった。例えば、ペリーの日本遠征について、第一回の来航の年、一八五三年五月に、その目的や積荷の数々を具体的に紹介する記事が載った。『ニューヨーク・ヘラルド』紙からの引用だとある。また一八六八年二月に京都で、イギリス公使パークスの一行が襲撃されるという事件が起きたが、これも同年六月に記事となっている。『タイムズ』紙からの引用だとある。その他、日本に関する情報として旅行者の手紙も使われている。一八六〇年に箱館を訪れた一フランス人の紀行文が一八六二年三回にわたって連載されている。

次に紹介するものも、幕末に来日したフランス人が送ってきた、ある一通の手紙をもとに日本の情勢を述べた記事である。まずその

記事をみてみよう。

一八六八年二月三日付
「今週の政治問題」

ひとつの革命が日本で成し遂げられつつある。しかし届けられる通信(特派員)の存在ははつきりしていないから察するところ『モニター』紙が言っているような性格の革命ではない。野村宗七(原文では Munata Souchi)がモンブラン伯宛の手紙の中で語ったさまざまな出来事についての話は、大君の辞職が真に間近なものになっていることを物語っている。その手紙の中で最も興味深いくちりを紹介しよう。

今年、十一月七日(一八六七年)、ご存じの薩摩と土佐、芸州(広島)の藩士の代理人たちが、前將軍の兄弟である一橋(前將軍家茂と一橋慶喜は兄弟関係にはない。訳した際の誤りか)を二条城(將軍家の京都での住居)に訪ねた。冒頭、將軍は国内の趨勢を尊重したいという希望を明らかにした。

彼は言った。この動きは自分に身を引くようにと迫る非難を含んでいる。もし、江戸の歴代の將軍がずっとそれによって影響力を保持してきたところの権利を、辞退すべきだと代理人たちが言うのなら、自分にはその用意があると。

代理人たちの返答は要約すると次のようであった。將軍の良心が將軍に命じるところのことをおやりなさい。それも速かにやりなさい。

そして、直ちに代理人らに述べた声明とほとんど同じ文句の將軍職辞職書が作成された。以上、みなさんも同じ意見だろうが、実に甘ったるい革命なのである。しかし最近入手した情報によると、この革命はより混乱した展開となる気配である。

ここに用いられている手紙の差出人、野村宗七と受取人のモンブラン伯とはどういう人物であろうか。一八六七年(慶応三)に開かれたパリ万国博覧会で、薩摩藩が佐賀藩とともに幕府とは別に、対等の形で陳列所を設け、幕府の使節を大いにあてはさるという事があったが、その時薩摩藩の手助けをして功があったのがこのフランス人貴族モンブランである。設立には結局至らなかったが、一八六五年頃より、殖産興業と貿易振興をめざす薩摩藩と貿易商社の設立を画策したりしたのも彼である。

一八六七年の万博終了後、モンブランは薩摩藩に招かれて薩摩藩の一行とともに来日した。一〇月二〇日に長崎に着き、その後二月に入ってから鹿児島へ向けて出発している。とすると、『イリュストラシオン』紙が入手した手紙は、

モンブランが長崎滞在中に受け取った手紙だということがわかる。差出人の野村宗七は薩摩藩士、野村盛秀という人物である。一八六三年(文久三)の薩英戦争の際イギリス軍に捕虜となり薩摩でその本意が疑われていた五代才助(友厚)の復帰に尽力した人として知られている。前述したパリ万博の時に家老岩下万平の随員の一人として渡仏している。モンブランとの出会いはこの時である。手紙の中で「最も興味深いくだり」として取り上げられているのは、慶喜が一八六八年(手紙の紹介記事では七日と記されている)十萬石以上の諸藩の在京重臣を二条城に集め、大政奉還を諮問したことを伝える箇所である。しかし翌日、早速行われた大政奉還には触れていないので諮問後すぐに書かれた手紙であろうか。いずれにしても、薩摩藩とモンブランの深いつながりを見ることができよう。

日本に関するいろいろな情報の中でも、この手紙は現地からの、それも当時フランスが支援していた幕府側とは反対の陣営からの情報であることを考えると、大変貴重な情報であったと言える。『イリュストラシオン』の情報収集力はかなりのものであったとみてよいだろう。

(中武香奈美)

横浜人物小誌

10

明治初年の翻訳屋

矢野二郎

一冊の興味深い本がある。啓蒙書などを収録した『明治文化全集』の『経済篇』に『会社弁』(福地源一郎訳述・『立会略則』(沢沢栄一述)などとならんで載っている『蚕種商法』がそれである。明治二年四月に「吉田屋表二郎述」として出版されたこの書は、当時盛んであった蚕種輸出について論じ、外商に対抗するために日本人が団結すべきことを、その具体的方策として「商社」設立・蚕種直輸出を敢行すべきことを、強く国内商人に訴えかけている。

現在、その写しが群馬県や長野県の旧家の古文書の中に散見されることから推せば、この書は開港横浜を経て養蚕地域に相当広く流布したようである。また、どうやら、この書が火付け役となつて、蚕種輸出に関する国内商人の商権回復運動が展開して行つたらしい。外国商人の蚕種の買叩きを憂いて地方荷主から行政当局に提出された嘆願書の文面に、明らかにこの書の表現を移植したと思われる箇所が見られるからである。ところが、著者「吉田屋表二郎」

が誰であるのかはつきりしないのである。この書には、海外渡航船の選びかた・運賃・海外市況・為替の取組方法など、直輸出を行うに当たっての事細かな手引が盛り込まれている。したがって、著者でありうるための条件としては、西洋事情に通じていて、おそらくは渡航経験者であること、且つ、横浜での貿易実務に習熟していること、が要求される。尾佐竹猛による全集の解題は「吉田二郎のことではないか」としているが、根拠は示していない。吉田二郎は、埼玉出身で、明治四〇五年に伊藤博文がアメリカ合衆国で銀行制度を調査した時、現地での部下として活躍し、後年は外交畑を歩いた人物らしいが、詳しくはわからない。

彼についての追跡はまだ果たしておらず、謎を抱えたままなのであるが、最近、著者の資格を十二分に備えているもう一人の「二郎」を識つた。わが国の近代商業教育の祖、「矢野二郎」である。

彼の世に出るまでの経歴は次のようなものである。一八四五(弘

化二年、出生、幕臣富永惣五郎の二男。幕臣矢野氏を冒す。十代半ばにして英語修学を志し、一六歳の時、外国万英語訳官森山多吉郎に就き、さらに西吉十郎に学ぶ。西は彼を米国公使館書記官に紹介し、週一時間の会話の機会を得たという。翌一八六一(文久二年、同じ西門下の益田孝・尺振八と共に外国方訳官となる。英米との交渉に狼狽した幕府が熟達した通訳を求めての抜擢であつた。ところが、短時日の修学とあつて、英語力に不満を感じた三人は、自ら申し出て横浜運上所後の税関への出張を命ぜられる。横浜で彼らはさらに約二年の実地訓練を積むのである。



矢野二郎
(横浜貿易新報 明39.6.19)

一八六三(文久三年、矢野ら三人は外国奉行池田筑後守らの横浜鎖港談判のための遣欧に随行、翌年帰国。「二郎の帰朝せるは其二十歳の時にして語学は一段の進歩を加へ、思想は急進に転じて欧化主義者とな」つたのであつた。帰国後、彼は幕府の騎兵伝習隊に入り三年間の「学問の休息時代」を送る。

今日評価されている彼の業績は、一八七二(明治五)年、の外交官生活(ワシントン在勤、一時代理公使)を経て帰国してからの事に属する。続く一七一年間の彼は、商業教育に一身を投じ、森有礼の設立したわが国初の商業学校「商法講習所」を引継ぎ「高等

商業学校」にまで育て上げた。現在、その後身の一橋大学構内に初代校長である彼の銅像がある所以である。一九〇六年没、享年六二歳。

さて、横浜の人物として特に興味深いのは、この間の時期、すなわち一八六八(明治元)五年、二四(一八八二)歳の頃のことである。

明治元年、戊辰戦争に先立ち騎兵隊を辞めた二郎は、横浜に赴き山手外商一八番館の通訳となつて自活し、同年末に自営の翻訳所を開業する。伝記の編纂者島田三郎は、当時の状況を次のように叙述している。

「明治元年の頃は輸出入の額次第に増して、外人の開港地に住するもの愈々加はれり、唯彼我の言語通ぜず、僅に片語の訛音手眼の暗示を以て相互の意を解し、之に因て巨額の金を授受するが如き極めて不安の商業行はれたり、契約の文書を正確に起草する者なく、之がために屢次内外人の争訴を引起し、狡猾商賈は其不備を利用して己れに不利なる約束を破れり、且之等の錯誤の為に意外の紛擾を醸し、貿易の進歩を妨げ、彼我の交情を損すること少からざりき………當時此業(商用翻訳業)に適當の資格を有する二郎の如きは恐らく絶無なりしなるべし、其實用英語の会話書翰等に熟するは言ふまでもなし、運上所役員となりて商品の扱ひに慣れ、外人に知友多く、加ふるに敏捷果斷且超絶の常識を有す、是皆商業の媒介者たるべき必須の性格なるを以てなり、然れども更に之よりも須要の資質は、約束に背かず信義を重じ、秘密を守り委託を空くせざるの氣象にして、當時の貿易上に最欠乏せるは実に此種の人物なりき」

かくして、商売は大当りし、五年間で三万両と言われる巨富を彼は築いた。この私財は後年の商業教育活動に惜しみなく注ぎ込まれるのである。

『蚕種商法』の著者であるかはともかくとして、矢野二郎の資料が残つていれば、そこには、明治初年に内外商を媒介した翻訳業者の目から見た横浜が、生き生きと写し出されているに違いない。大方の御教示を仰ぐ次第である。

(引用は、島田三郎編『矢野二郎伝』大正二年刊、による。年齢は数え年。)(井川克彦)

矢野二郎の
米田三郎の
手紙



『たまくす』は、横浜開港資料館の普及誌として、年一回発行されていますが、今年度の第四号では、二月から始まる「黒船絵巻と瓦版」展にあわせた特集が組まれています。カラー・グラビア一六頁のうち九頁は、全長約一八メー



行事開催予定(昭和六〇年度)

▼展示 (企画展示室)

企画展示「黒船絵巻と瓦版」(2/15/5)

▼講座 (講堂)

横浜市史講座後期「開港期の横浜」2/8・22「近代日本憲政思想の歩み」佐藤孝(館員)、3/8・22「横浜居留地もののはじめ」斎

トルに及ぶ福田本「米艦渡来紀念ノ図」の完全な紹介にあてられています。この特集の解説記事については、「収蔵資料の紹介」の項でも触れられているので、ここでは省略します。

今号から新しい連載として「横浜新風土記稿」と「資料散策」が登場します。前者の阿部征寛「本牧本郷村」は、当村の開港前の様子を復元しつつ、それが横浜開港にもなっ

て変貌していく過程をたどったものです。

藤多喜夫(館員)、13時30分/15時 定員八〇名 受講料一講座二回九〇〇円

行事開催予定(昭和六一年度)

▼展示 (企画展示室)

(1) 関口日記にみる幕末明治の横浜 5/8/7/30

(2) 浮世絵師の描いた横浜開港 8/2/10/29

(3) 万延元年の遣米使節 11/1/28

(4) 外国人の描いた横浜開港 1/31/4/22

▼講座 (講堂)

(1) 横浜歴史講座

(2) 古文書を読む会「市内地方文書に親しむ」

(3) 資料講読会

(4) こども歴史講座 8月上旬

横浜開港資料館普及誌『たまくす』第四号

特集「黒船絵巻と瓦版」

後者の「資料散策」は、館収蔵資料の紹介を兼ねて、あまり知られることのなかった興味深い事実を掘り起こそうとするものです。その一つ、西川武臣「御書院番士

酒依清之丞の一生」幕府直参旗本の日記と手紙」は、現在の横浜市内にあって領地を持っていた一没落士族の書き遺した日記と手紙をとおして、明治維新前後の転換期の歴史が個人にとって持った意

味を考えてみようとしたものです。また、中武斎奈美「フランスの週刊紙「イリュストラシオン」への日本の登場」は、開国直前の一八四六年、日本とフランスの危機を

はらんだ出会いの模様を、白仏両方の資料によって、再現しようとしたものです。

三回目をむかえた連載「横浜もののはじめ考」では、新聞が取り上げられています。伊藤久子「開

▼出版物

(1) 『たまくす』第4号「特集・黒船絵巻と瓦版」五〇〇円

(2) 『吉村屋幸兵衛関係書簡第三集』

▼新着資料

(1) 『ル・モンド・イリュストレ Le Monde Illustré』1857-1935

▼閲覧可能複製資料

(1) イギリス国立公文書館蔵「サトウ文書 The Sawo Papers」

(2) 県立文化資料館蔵「池谷健治氏旧蔵関口家文書」

(3) 群馬県吉田宰治家文書

(4) 長野県小山正邦家文書

(5) 長野県竹内憲三家文書

(6) 神奈川県山室宗作家文書

(7) 金沢区山口正司家文書

(8) 木村龍雄氏旧蔵建築図面

開港記念会館・市長公舎・競技設計案」

北区 村松みね代氏



港地横浜の欧字新聞」及び佐藤孝「日刊新聞の誕生——『横浜毎日新聞』——」によって、開港場横浜で近代的な新聞が誕生し、それがしだいに普及していった、日本人の生活のなかに入り込んでいった様子を知ることができるでしょう。

いずれも、確かな資料に基づき、正確な事実を発掘するよう努めたものですが、同時に親しみ易く読んでいただけるよう、図版を豊富に盛り込み、文章は簡潔にする配慮が払われております。

なお、本文は一六頁、A四判、定価は五〇〇円の予定です。

五回目の新年を迎えました。本誌も一四号を数え、八頁仕立て、収蔵資料の紹介をはじめとして、館長対談、展示余話、資料よもやまばなし、横浜人物小誌、ズームアップ、資料館だよりと内容的にも定着しつつあるところです。季刊、今回から発行部数を一万二千に増やしました。企画・特別展示に沿った題材と最新の調査研究成果のさわりを編集の基調にしています。当館の普及誌『たまくす』を併読していただければ幸いです。本年も御指導御鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。(良)